


不完全
犯罪

広瀬
隆



 集英社文庫

ふ かんぜんはんざい
不完全犯罪

1988年12月20日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 ひろ せ たかし
広 瀬 隆

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印刷 中央精版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© T. Hirose 1988

Printed in Japan

ISBN4-08-749409-8 C0193

集英社文庫

不 完 全 犯 罪

広 瀬 隆

不完全犯罪
目次

不完全犯罪	七
空飛ぶ異人	二九
死人に口なし	五一
生か死か	六九
考古学	九一
言語学	一〇五
釘さし	一二三
キエム爺さん	一四一
おそるべき結末	一六一

不完全犯罪

蕭々と降る雨のなか、黒い傘の行列が延々と続いていた。

時折強い風がこの葬送の列に吹き込むと、黒衣にからみつき、それでも人びとは愁嘆の表情と堅い姿勢を崩さず、ゲッティンゲン郊外の墓地から街路への道を取り、十字架の墓標の列のように、重い足取りで帰途につこうとしていた。

ハンブルグが歓楽の街であれば、ここゲッティンゲンはドイツで並ぶもののない文化の街として静かにたたずみ、青味がかかった緑のなかに、二百年、三百年の歳月を経た老木が点在し、落ち合つて流れる川を囲んで、一種変つた活気に富む薨の群が見渡された。

と、埋葬の儀が終るのを待ちかねていたように、道ばたに停まっていた車から二人の男が飛び出すと、レインコートの裾を風にあおられながら葬儀の人波の中心部へ向かつて行った。

やがてそのうちの一人が、喪主のヘルマン・ハンスリックに近づくと、周囲を氣遣つて胸のポケットからゆっくり警察手帳を取り出しながら、傘の下に入った。

「奥様が突然亡くなられた御不幸、まことに悲しみに堪えない御心境と存じてあげており、このような場所でお呼び立てする失礼を深くお詫び申しあげなければなりません、奥様の自殺につきまして……いささか疑問の点がございます」と、極めて丁寧な口調で、男は

ヘルマンの耳許に口を寄せて語りかけた。「よろしければ、あの車で、署まで御同行願いたいのですが」

「どのような疑問でしょうか」と、オペラ界の王者ヘルマンは大柄な体がかがめ、一瞬戸惑いながらも、真剣な表情で問い返した。

「奥様のアンナ様は、殺されたのでございます。容疑者は、ヘルマン・ハンスリック、あなた様でございます」

その口調は相手に礼を尽くしながら、断固取り合わないといった毅然たる調子のものであった。

それからふた月の暦こよみがめぐられた。

当地の裁判所は、世界屈指の歌劇王による殺人事件の公判第一日目を傍聴しようと、入口にずらりと人垣が作られ、好奇心に駆られた人びとが、今や遅しと開廷時刻の到来を待ち受けていた。

「悪事千里を走る」の諺ことわざ通り、ドイツ全土がこの事件の噂話と興奮で熱気にあふれていたが、華麗なオペラが演じられるステージの裏に秘めやかな私生活があるのを覗のぞき見ようと、とりわけスキャンダラスな好奇心が人びとを駆り集めたのである。しかし、この群衆は真相など何ひとつ知らなかった。検察側は、証拠や証人が公判前に外部へ漏れることを

おそれ、実に用心深く口をつぐんだまま、本日の裁判に臨んだからだだった。

それだけに、検事が毘わなを仕掛けてしているかも知れないという臆測が、奈落の底へ落ちてゆくオペラ王の姿を空想させて、残忍ながら、人びとに悪魔的な愉たのしみを与えていた。そのヘルマン・ハンスリックの姿は、ちょうどベートーヴェンの歌劇《フィデリオ》の第二幕で、暗い地下牢の重い鎖につながれたフロレスタンが、

—— In des Lebens Frühlingstagen Ist das Glück von mir geflohn! (人の世の春日に、幸福が私から逃げ去った)

と歌いあげる情景のアンコール舞台と呼んでもよかった。

だが容疑者とされた彼自身は、記者団に対して完全な無実を烈しく主張し、公判の舞台で自分はきつと「濡れ衣ぬれぎぬ」を証明してみせる、と豪語していた。ただ不思議なことに、彼は妻のアンナが自殺したという当初の経過についても疑惑を抱いていたようで、

「自殺する理由はないのだ。彼女はオペラ歌手として絶好調だったし、たとえ悲しみがあってもそのため自ら命を断つほど精神力の弱い女ではなかった」と、自分に不利な言葉を漏らしていた。

そのヘルマンが裁判所に到着し、官憲に左右の腕を取られながら、野次馬の罵声と激励を同時に受ける奇妙な歓迎をくぐり抜けて廷内に入ってゆくと、傍聴者もそれに続いてぞろぞろと入廷して行った。

宣誓などの法廷儀式を簡潔にすませると、裁判の幕が切つて落とされ、まず検事が立ちあがつて単刀直入に訴状を読みあげた。頬がこけ、長身瘦軀そうくのこの検事は、いかにも裁判ゲームを心得たかのように朗々たる口調でヘルマンの有罪を主張し、アンナ殺害の現場を再現してみせた。

それによると、十二月五日の夜、ハンスリック家ではヘルマンとアンナの夫妻二人だけで普段と変りなく七時に夕食を摂ったが、その二時間後の九時になって、夜の声楽レッスンに出掛けてくると言つて、ヘルマンだけが外出した。これは夫妻にとって不自然な行動ではなく、これまでも大切な公演を控えている時には、夜のステージに備えて夜のレッスンを繰り返す習慣は欠かさない二人だった。その夜は、ヘルマンだけが二週間後にシュトゥットガルトでのクリスマス公演を控えていたため、少し寒気を覚えたアンナは風邪をひかない用心にと、自宅でくつろぐことになったのである。

彼が愛犬を連れてレッスンに出掛けた先は、ゲッティンゲンから車で一時間、途中で断崖沿いの葛折つらおりを何度か抜けて、ハルツ山脈やまあいに向かった山間の人っ子ひとり居ない静かなヒュッテで、そこなら誰にも気兼ねなしに「ヘルマン・トーン」と呼ばれる彼のバリトンを心ゆくまで磨きあげることができた。

到着直後の十時すぎに仕事上の知人から電話を受けたあと、深夜までレッスンに励んだヘルマンは、例によつてワインで軽く喉のどを潤してから、万が一にもあの崖道で事故を起こ

さないよう、翌日になってから帰宅することにした。

翌日午後帰宅し、夫妻だけが持っている鍵かぎで扉をあけ、家に入ったとき彼が寢室に発見したのは、ベッドから半身を乗り出したまま冷たい軀むくろと変り果てた妻アンナの姿だった。枕元には、彼女の筆蹟で書かれた遺書のほかに、錠剤を包むプラスチック・シートが抜け殻のように山となって散乱し、睡眠薬ペントバルビタールの商品名が、その薬包シートに読み取られた。これは、催眠作用が迅速で、強く発現する薬物として知られ、彼女自身が主治医から処方して貰っていた薬だった。

ヘルマンは直ちに警察へ電話して救急車を呼んだが、すでに手遅れで、アンナは蘇生することなく、永遠に帰らぬ人となっていた。鑑識課による一応の解剖検査の結果も、ペントバルビタールによる中毒死であることが確認された。悲しみに打ちひしがれたヘルマンの強い希望によって、遺体は翌日直ちに埋葬され、それでも音楽界の最高峰に立つ夫妻を襲った悲劇だけに、葬儀にはヨーロッパ全土から数多くの人々が駆けつけたのである。

以上が、ヘルマン本人の供述と、警察の裏付けが取れた事実などを組み合わせ、再構成された事件の概要だった。これだけの事実が揃っていれば、アンナが自殺したことは一目瞭然と思われた。

しかし検事は、アンナには自殺する動機がなく、ヘルマンの企たくらんだ完全犯罪である、と言い出したのである。

「その十二月五日の夜、ヘルマンが出発する五分前の八時五十五分にアンナさんは友人の女性に電話をかけ、今から夫が出掛けるので帰宅はきつと明晩になるだろうから、翌六日の正午に《アマデウス》の映画を観に行こうと誘い、ヘルマンが出発して十五分後に彼女から折り返し確認の電話を受け、約束を結んでいる。皮肉にも、これはモーツァルトがサリエリに毒殺されるという、仮説上の史実に題材を取ったミステリー映画だが、ハンズリック家悲劇の十二月五日がちょうどモーツァルトの命日に当たることは、みなさん御承知であろう。この偶然の一致が生じた理由については廷内の諸賢に推察をお任せするが、今から自殺しようとする人間が、自ら受話器を取って、陽気な声で友人を翌日の映画観賞に誘ったりするものだろうか」

傍聴席から、我が意を得たりとばかり大きなどよめきが起こり、ここで初めて、検事の「殺人容疑」の主張に対してそちこちで心得顔が見られた。

当の女性が証人として喚問され、検事が述べた通りの事情で自分が「アンナの自殺」に不審の念を抱いて警察に電話したこと、また、当夜十時すぎに別用でアンナに電話した時には誰も応答者がなかったので不思議に思ったこと、を証言した。死亡推定時刻は、彼女が「アンナと最後に話した九時十五分」から「その十時」の間とされ、鑑識の結果と符合していた。

こうして、ヘルマンが出発直前に睡眠薬を大量に飲ませて毒殺したという仮定を立てた

検事は、ペントバルビタールをアンナ自身が主治医から処方して貰っていた理由を説明するため、鑑識官を喚問した。

「ヘルマンが忙しさと名声を口実に、医者から薬を貰ってくるよう妻に頼み、自分が飲むふりをして貯め込むのは容易なことだ。我々の目は節穴ではない。台所に放置されていた二つのグラスを調べた結果を、報告していただきたい」

「両方のグラスから夫妻の新しい指紋が検出され、その底にあったジュースの残渣ざんさを分析した結果、アンナさんの唾液が入っていたグラスからペントバルビタールが検出され、ヘルマン氏の唾液のほうは薬物反応なしでした」

「この薬は、ジュースには溶けやすいものですか」

「比較的早く水に溶けますが、固く圧縮された錠剤をあれだけ大量に溶かすには、すりつぶすのが賢明でしょう。で、ハンズリック家の乳鉢、つまり陶製のすり鉢ですが、それを分析しましたところ、よく洗浄してありましたが、微量のペントバルビタールが明瞭に検出されました」

「あなたの経験の範囲でよろしいが、鑑識官として今日までに、睡眠剤を乳鉢ですりつぶしてからジュースに混ぜて服用したという自殺者の例を、ほかに知っておりますか」

「私は二十三年間この仕事に携たずさわって参りましたが、自殺例では一件もなく、このような現場の状況があれば百パーセント他殺事件のものでした」

検事の詰めは手際よく、ヘルマンの弁護士はおそらく乳鉢の件について何も知らされていなかったのだから、被告と共に次第に顔色が蒼ざめてゆき、誇りを傷つけられた不興げな表情を隠す術もなかった。

しかし気を取り直すと、アクビをこらえた時のような二重顎をしごき、猪首に乗ってつやつやと輝く丸顔を努めて引き締めながら、弁護の反撃に転じたのである。

「いま検事が示した物的証拠は、すべてアンナの自殺を立証するものである」
こう切り出すと、短いエンタシスのような体をくるくる回しながら、以下のような弁論を展開した。

たとえこの鑑識官がどのように深い経験を持つとも、大量の薬を目にして勇気をくじかれそうになった自殺志願者が、一気に睡眠薬を飲み下そうと錠剤を粉々にし、それをジュースに混ぜてから自殺したという可能性は大いにあるのだ。世界でその最初の女性がアンナであって、なぜいけないのか。検事の弁論は他殺という先入観にとらわれた状況証拠の羅列にすぎないのである。自殺の直前に友人を《アマデウス》観賞に誘ったのは、彼女が毒物死から現在評判の映画を連想し、モーツァルトの化身となって死を迎える遺志を秘密の方法で伝えようとしたからであり、そのためわざわざ十二月五日を選んだ可能性もある。こう考えてなぜいけないのか。いや、ほかにも無数の可能性がある。検事の弁論は冤罪を生み出す時の典型的なパターンに陥ったものであり、殺人と自殺の両方の可能性があ